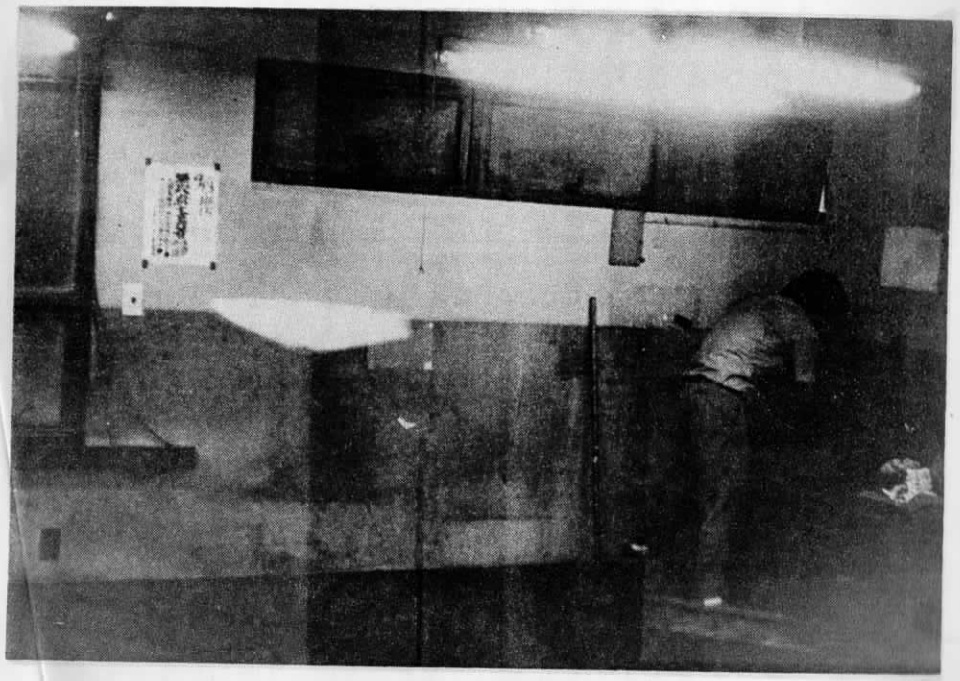
毎月一回15日発行 昭和50年10月15日発行・第69号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

# リベルテール

**10**月号



連帯会議会場設営風景　(提供・吉葉)

Libertaire VoL, Ⅵ, No **10**

無　政　府　主　義　誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和50年10月15日発行第69号
リベルテール　定価一〇〇円(郵便料共)

■ リベルテール　Le Libertaire
■ 1975年10月15日 発行　VoL, Ⅵ, No.10
■ 編集兼発行者　三浦精一
■ 発行所　東京都練馬区大泉学園町２１９０
萩原晋太郎方　リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替 東京１３３８３０番 三浦精一

## 今月のことば

**天皇訪米終る**

オーイ　ちかれたびーお疲れさま、しんどいわ。

報道関係者
シークレットサービス
児島　襄
宮内省
} 各位

**お国自慢（乱闘国会）**

わが国には穏和なゴリラがいる

ウガンダ国アミン大統領

わが国には穏和な代議士がいるよ

日本国民

**受益者負担**

郵貯利子引きさげ
物価　値上げ
} 国鉄・酒・タバコ・郵便
公定歩合引きさげ
新釈・庶民の金で企業を優遇すること
上に厚く下に薄いこと
——新花字典より——

## 目次


巻頭言——1
源ニィ村木の最後　谷　寛城——2
天皇制を墓場に　秋月　優——6
相沢さんよりの手紙　相沢尚夫——8
「日本無政府共産党」をめぐって
ひとつの釈明　三浦精一——11
余分な回答　山本二夫——12
野火——13
海外だより——15
声明（スペインでの処刑）——17


# 巻頭言　価値とは何ぞや

1975・10月号

アダムスミスこのかた、古典経済学派は「価値」を財貨の効用価値と交換価値の二つの面からとらえた。水や空気は使用価値は大きいが、交換価値を持たない。然し金や宝石は効用は小さくても、衣食住と交換する力を持つ。この交換価値を、リカードはこう考えた。

任意に生産できない財＝稀小性

任意に生産できる財＝その生産に投下された労働量

リカードの労働価値説を継いで大成したのが、マルクスだ。商品の価値は個々の生産に必要とした労働量ではなく、社会的平均的労働であるとした。けれども現代の需要供給、流通機構、労働市場、賃金構造等を見れば、労働価値説も完全なものではない。芸術品の評価にしても問題がある。

そこで、リカード以後の古典学派は労働価値説を捨てて、生産量説から生産費説をとって、市場性を解明しようどした。

こうした客観価値説に対して、オーストリア学派等は財が人間の欲望を充す力＝効用に対する人々の主観的認識を価値とした。これは心理的な分析としてはいいが、やはり仮説の域を脱しない。

決定的な説がないままに、ついには経済学から価値説をとり除け、という主張も出てきた。ドイツの歴史学派。

イギリスのフェビアン社会主義、アメリカの制度学派等がそれである。だが、価値でなく価格の問題だけにとどめるにしても、交換目的物に対する価値判断が必要になる。

アナキストは、古典的なプルードンのほかに経済学を持っていない。そこで、アナキズムの立場から、新たな価値説を生み出さなければならない。サンジカリズムが少数の学者の脳味噌から作られたものでなく、労働者の体験をつうじて築き上げられたのと同様に、共同でこのテーマに取組むべきであろう。

# 源ニイ村木の最後

## ― 村木源次郎に関する和田久「獄窓から」の記述はそのまま読めない ―

谷　寛城

少しオーバーだが、将来日本の歴史に誤まり無からしめるため、可能な限り、今のうちに訂すべきを訂しておきたい、との考えから以下敢て記しおく ―

高血圧など世間なみの老人病のため、私は殆ど寝たっきりのところを起き上って、余り近くもない世田ヶ谷深沢町の吉田一君の仕事場まで「旧友を追悼する会」に出席したくてよぼよぼと出かけたのは、三十四年十月二十五日、まづ好晴と云える正午すぎであった。

この日の出席者は五十人近いと思われるほどの盛会で、神近市子、江口渙、田中勇之進など、めづらしい顔も見えた。

私は、大杉三十年の会、吉田只二君の「貧乏人根絶論」の会にも出たが、何の気力もなくて、求められても頑固に口を利かなかった。というのは別段依怙地でも何でもなく、なるべく多く、友人の顔が見たい、というなさけない気持ちだけで、話したり考えたりなど面倒でたまらなかった。

ところが此の日、岩佐作太郎老が立って、村木源次郎君市ヶ谷刑務所にて病状危篤になり責付出獄の際最後の別れをさせた共犯の和田久太郎に対して詫び言を云った、とまことしやかに述べたてた。そこで私は不作法にもその話の終らぬうちに立って反駁した ―

『今の岩佐老の話は全然嘘だ、市ヶ谷での村木の最後に立会った者は、今日では私一人しか生きていない、村木は全く無意識で、たゞ息しているだけで、何も云えなかった。引きつづきおこるひどいケイレンに身もだえし、苦しみ、あえぐばかりで、何も云えるわけはなかった』と私はハッキリ云い切った。

岩佐老は妙にポカンとして私を見つめていたが、何一つ云うこともなかったらしい。

老人は此処と限らず、どこでもこんな話をしたらしいが、久太郎の「獄窓から」を見ていると村木が何か少しは云ったかのように受取れるふしもあるが、そう受取るのは大間違いで、老人なみの誤謬を冒すことになる。

大正十四年一月二十三日午后一時か一時半、『ムラキキトクスグコイ、フセ』と云う電報が労働運動社にとび



込んだ。

その時「労連に居たのは誰れもが「おばさん」と呼ぶ延島英一のおふくろと神戸から上京してアルスに渡すフェブルものの原稿の手入れをしていた私の二人きりだった。

おばさんはアタフタと電話かけに行ったが一時間もかかって帰って来て、「近藤様も英一も、そのほかどこにも電話したが誰れもかもみんな出かけて留守、で連絡してもらうよう頼んで来ました」とか云った。

で、私達二人が市ヶ谷刑務所の門を入ったのは三時少し前かと思う。布施氏は正面玄関中央に立って待っていたのが、私達二人を病監に案内してくれたが、責付出獄の手続きをしているんだが相棒の山崎君に電話しても連絡がつかなくて困っている、とか云いながら、私達が病室に入ると、奥の方に急ぎ足で行ってしまった。

洋風十畳位の古びた病室、扉口を入るとスグ左のベッドにひどく小さくなった村木、枕もとに見取りの看守が机を据えてツクネンとしていたが、やっと立って、『聞き慣れた声で大声で呼ぶとヒョッとしたらきこえるかも知れん、やって見給え、大きな声で』と云われて

おばさんは村木の名を呼び続けたが、大声どころか涙声で、一向反響がない。私が替って呼んだがやはり駄目。完全に意識はない、二、三分おきに強いケイレンがおこる、少し間をおいて更に強いのが来る、弱々しいうめき声、あえぐように口をゆがめる。絶望だ！

私は名を呼ぶ力も消えてしまった。

洋風、洋式と云っても此の古ぼけた部屋は一向掃除もしないらしく、天井は蜘蛛の巣だらけ、壁も窓ガラスもすっかりよごれて鼠色と云うより黒に近い、中央に高く吊らさがっている十六燭位の電球もハダカで黒くすすけているが、その弱い光でやっと人間の顔が識別される程度には役立っている、が、何から何までわづらはしい。

そこに布施氏がそっと顔を出し、『山崎君まだ連絡つかないが責付になるからスグ車の用意し給え』と云ったので、私はホッとして飛び出した。

だが勝手の分らない街に出ても何処に自動車があるやら：：やっと自動車屋を見つけても『そんな大病人だめですよ、それに刑務所じゃ御免ですよ』とばかり、霊柩車をと思って葬儀屋に行ったが、生きてる人は乗せられないと云う。仕方なく、私は病室に戻り、おばさんが自分の記憶を呼びおこし、白山方面に電話してやっとこさ寝台車を決めた。

そこに布施氏が現われて村木の責付仮出所きまったか

ら和田や古田にお別れさせようかと云い出し、私共も賛成して急いで、その談判のために走った。

間もなく扉口で縄を解かれて、和田が一人入って来たが、気抜けしたような顔して立ちすくんだ。外から急に暗い所に入ったので何も見えず戸惑ったようだった。

『君の声ならいいだろう、ヒョッとすると聞こえるというのだ、耳もとで大きな声でやって見ろ』と、私は久太郎を村木のそばに押しやった。やっと気がついたようで久太はベッドにすり寄って、泣くような顔だが声は強く叫びつづけた —

『村木！村木！分るか、久太だ！オイ村木！君は今日労運に帰れるんだぞ！』

何度も繰り返し叫んだが少しの反応もなかった。が久太は叫びつづけ、まるで気でも狂ったように叫び、グングンゆすぶり出したので、私はあわてて止めた。

いつの間にか古田が来ていたが、これは足もと寄りに立ったきり、何一つ云わなかった、云う言葉がなかったのだろう。

間もなく寝台車が来たと云い、布施氏の他に四、五人入って来た。これは獄医、判、検事などで、雑役夫も入って来た。

雑役夫が村木を担架に移し、霧雨のけむる夕方のような玄関に出ると、警吏十人ばかりが列をつくっていた。そこに山鹿が受附などふっとばしたように、駆け込んで来た。

いつの間にか、もう和田も古田も手縄がかけられていた。

寝台車の中、村木の担架の右と左に私とおばさんはもぐり込み、車はすぐ動いた。

行先は運転台に乗り込んだ特高が教えるのだろう、山鹿はうしろについて来る尾行の車に乗ったのだろう。私はいつの間にかそんなつまらんこと考えていた。

村木のケイレンは同じ様につづいていた、駒込片町の「労運」の露路口に車がとまると恰度そこに帰り合せた近藤がしがみつくよう担架をかついだ。五時過ぎていたが霧雨は静かに降っていた。村木の無言の帰宅を悲しむかのように。

この時から、村木は「労運」の階下二部屋に盗れるばかりの多くの同志に囲まれ、知らせで横浜から駆けつけた生母に見とられながら夜を明かし、翌日正午すぎ、づっと続いたケイレンがやむと同時に息をひきとった。

三代に亘った生粋のアナキスト我が村木源次郎はこの



ように死んでいった。

山崎弁護士があたふたと駆け込んで来て、布施氏の連絡の届かなかった事情をクドクド弁じたてたのは、その夜おそくなってからだった。奥山先生も同じようなことだった。日頃から村木と限らず同志みんなが生き神さまのように敬愛措かなかった先生にも村木はついに診て貰う時を持たなかった。

布施氏が山崎氏との連絡にやっきになったのは、責付出獄の手続きに係り弁護士二人の連署が必要だったに違いない。

さて肝心の問題！

このドタン場で、村木が一言二言云ったかのような久太の記述を私は嘘だと断じたが、この時の和田に於ては本当だったかも知れない。と云うのは、泣き叫び、はては危篤状態の病人の肩に手をかけてゆすぶり出した時の彼久太は全く錯乱状態で『オイそんなにゆすぶっちゃ駄目だ、労運に着くまで息をさせておかなくちゃ』と私がとめた程だから、錯乱した彼の耳には、うめき声の中に何か感得したことがあったかも知れない。

然し二一五頁から二一八頁までの俳句の肩書は詩的表現にしても念がいりすぎている。

和田が病監に入ってきた時は四時過ぎにいた筈。その時は、私とおばさんと看守一人のほか誰れもいなかった、まことに寂漠陰惨な死の床であった。看守がケイレン午后数回と云った様なことはない、二、三分おきに起きていた。責付出獄が決まり、寝台車も来ると決ってから彼等二人の訣別が交渉されたのだ。だから彼等の入って来たのは私達より一時間以上おそい。自動車交渉のことなどは私が彼久太に話したのだ。玄関に出て「悲風聞ゆ」は分るが「星二つ三つ見ゆ」など途方もない思い違い、その日はもとから曇り空で、いつも暗いにきまっている病室は一層暗く、私が車の交渉で街を走っていた時も、ズブぬれになったりしないが霧雨が気味わるく降っていた。

玄関に出た時も労運に着いた時も大体同じような空模様で「山鹿君の顔を認む」は先づ正しいが、「安谷君の声も聞ゆ」は甚だおかしい。二三年は絶えて聞かなかった声がこの時初めてきこえたとは、うすら寒いもの狂るほしい中を二十分以上同室し、必要上話しかけもし、それに彼、答えもしていたのだが、忘れたのか？

「沼判事など雑然たり」は車が来てからの最後の一場面だが、勿論検事も獄医もいた筈だが、山崎氏のいなか

ったこと、奥山先生のいなかったことも明確だが、「伯母様来る、続いて奥山先生、山崎氏と共に駆けつけられる」となると、初めからいたように云う山崎氏が又奥山様と共に来たことになる。一時間も前からいた伯母様も妙な時に又来たことになっている。

久さんの記憶はスッカリ駄目だ。

この前後倒錯、有無妄想の二、三頁は錯乱の翌日の詩的表現とでもして恕しておこう。言語に絶した悲嘆沈痛がそうさせたのだろうから。

# 天皇制を墓場に

## ―私の覚え書より―

秋月　優

先程から駅の方でさかんにマイクでがなりたてる声が聞える。耳をそばだてて見ると憲法なにがしと言っている。どうやら右翼らしい。暇にまかせて駅まで見物に行って見る駅前には大きな日ノ丸と青い旗を立てた宣伝カーが止っている。「生長の家」の学生組織らしい。そう言えば昔の私の友人に「生長の家」に会員がいた事があった。彼は三島由紀夫のファンであった。不健康この上ない日本の文化と伝統やらをほめそやかし、天皇を変態的に恋い慕い、あげくの果ては割腹自殺をし無様な狂態をさらした三島由紀夫を神の如くほめたたえもち上げているのが「生長の家」のボスである所の谷口雅春なのである。三島由紀夫自身が「生長の家」の会員であったとも言う。「生長の家」は宗教的仮面をかぶった憎むべき右翼集団なのである。彼らからもらったパンフレットは大部分、同席の侵略戦争讃美でうめられている。その中に源田実の言葉として次の様な文章がのっていた。

「日本では天皇即国家であり天皇は国民の幸福のみを心掛け給い、国民は天皇のために尽くす君民一体である」なんという戯言であろうか。

天皇裕仁に民草と足蹴にされ、恥かしめられなぶり殺された者の怨念を然と受け継いだ者の一人として、この様な戯言をほざく輩をのさばらしておくわけにはいかない。

思い起そうではないか。幸徳、金子、大杉、難波ら偉大な先駆者の血の道しるべを。虫けらの様に殺された幾億千の人民の血の道しるべを。今日、日本の支配者はマスコミ、文化人、へっぽこ学者などを総動員して、手をかえ、品をかえつつ天皇制の害毒を人民のあらゆる生活の場に流し込んでいる。赤い官僚主義者はその提燈持ちをしているのだ。九月、天皇裕仁は訪米と言う、許す事の出来ない行為をおかそうとしている。あの無気味な吸



血鬼のうすら笑いをうかべながら、アメリカの吸血鬼と血の分配の相談をしに。

左翼づらをした日本人の多くは、この吸血鬼裕仁を利用された者、朴念人として位置づけ制度の面だけしかながめる事をしない。

多くは、おっかなびっくりの半分批判、半分賛成と言う体裁のいいものである。この様な人々は、どこか自身にやましい部分があるかやむにやまれぬ権力志向か、救いようのないドレイ根性に落ち入っているかのいずれかであろう。天皇裕仁は「万世一系の統治者、神」であり「国民統合」の象徴」でもあり、「生物学者」でもあり戦争のあわれな「被害者」でもあると言う、怪人二十面相顔負けの変身の腕前のもち主であり、世界最高のトリックを用いる男でもある。我々は吸血鬼天皇裕仁、および皇室一味の化けの皮を白日のもとにひっぱがし、この世から天皇制を永久に抹殺するまで斗わなければならない。天皇制と真に対決出来るものは無政府主義において他にない事を私は確信するのである。

## 十月十二日の読者会報告速報

十月十二日、午後一時半より十五名の参加を得て豊島振興会館でリベルテール読者の会を開きました。

会は三浦さんの挨拶に始まり編集部紹介、現状報告、会計の説明があった後テーマであるリベルテールの今後を話し合った。継続発行と経済的基盤をくわしく論じ、集団リベルテールの性格について討議した。

細報は来月号で。

## 「アナキスト小辞典」刊行

今度萩原晋太郎さんが表記の辞典を少部数タイプ印刷で刊行する。幸徳・大杉はもとより淵源を安藤昌益に求め欧米ではヘンリー・ミラまで（優れた視点）取上げている。むろんハギシン君の性格として、無名戦士に多くの頁がさかれているが、運動系統図も含めて、この方面の初出だ。

「黒色青年」大正15年4月～昭和6年2月完全復刻黒色青年連盟機関紙が黒色戦線社から復刊された（定価二、五〇〇円A4版167頁）大杉亡き後のアナーキストの苦悶は思想をもった行動の獲得であった。不幸なことに思想性の純化と大衆性をもとうとする路線へと分裂して行ったが、いづれも革命者の高潔性を失うまいとした苦闘の跡がしのばれる。一読を乞う。